

授業研究会報告

本学では学内でアクティブラーニングなど新たな教育の手法を共有するという観点から、全専任教員を対象とした授業研究会を毎月1回実施しています。研究会では発表者が報告する授業実践の工夫や課題について、教員たちが活発な議論を交わしています。今回は2024年度5月～9月開催の研究会について報告します。

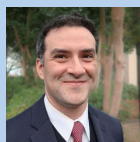


教授 やましま かずひろ
山島 一浩

【略歴】 筑波大学大学院博士課程 博士課程 修了
【学位】 博士(情報学)
【専門分野】 情報学、情報システム

■ 私はなにを教えてきたか (2024年5月2日開催)

AIとVR、AR技術を地域社会という共通の軸で繋がっている教育を行ってきました。従来の教育方法では実現できなかったような、よりインタラクティブで効果的な学習体験を可能にしています。学生の主体的な学びを、地域の歴史と文化の重要性から、デジタルアーカイブの役割を文化的な背景と技術的な側面から深く考察し、歴史的な資料を保存するデジタルアーカイブを組み合わせることで、学生たちは地域の歴史をより深く、そして臨場感を持って学ぶことができるようになったのではないのでしょうか。



助教 アンドラウス セルヒオ

【略歴】 東京大学理学系研究科物理学専攻 博士課程 修了
【学位】 博士(理学)
【専門分野】 統計力学、数理物理、確率論

■ 面白い授業とは何だろう (2024年5月30日開催)

物理、数学等の授業における個人的な経験を踏まえ、受講者と講師の交流のある授業が最も面白かった。その理由として、講師と受講者の会話を通して刺激しあい、エンゲージメントを促しながら受講者の理解度はリアルタイムで確認できることを挙げられる。

一方、時間の制限や受講者数の関係で交流が不可能な場合が多いので、受講者とエンゲージする手法が必要と指摘した。一つの提案として、ネット端末を用いて講義中にフィードバックを提供するプラットフォーム(Mentimeter等)の導入について説明した。



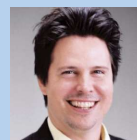
特任教授 むなかた さとし
宗像 諭

【略歴】 日本国際学大学 特任教授・松本秀峰中等教育学校 校長
【学位】 修士(刑事法学)
【専門分野】 学校教育における情報学、国際教育比較学、次世代教育に関する私立学校経営学

■ 高校現場で行われている探究型授業とは？ ～ 高校現場での探究型学習の現状と次世代の大学に求められる授業 ～ (2024年6月27日開催)

現在、中高現場に携わっている立場から、ここ数年間で、急速に中高現場での教育内容が変化し、今後どのような高等教育が求められているのか、どのような教育を提供していく必要があるのか、すなわちこれから大学がどのような教育活動を行い、社会性の高い学生を育成すべきなのかの示唆に関して、授業研究のテーマとさせていただきます。

私たちも、早急に変化に対応し、引き続き支持される大学に「シンカ」できるように、今回の授業研究会で大きな示唆を提供させていただきます。中高現場の大きな変化を感じ取っていただき、教育活動に生かしていただければ幸いです。



教授 ロバート ジュベ

【略歴】 University of Denver 経済学・ドイツ語専攻卒業、筑波大学外国人教師(英語)、お茶の水女子大学付属小学校教師(帰国子女クラス英語担当)
【学位】 学士(経済学・ドイツ語)
【専門分野】 児童英語教育、コミュニケーションのための英語、グローバルスタディーズ

■ Teaching English Communicatively at JIU (2024年8月29日開催)

Creating lesson plans requires a balance between fluency and accuracy. To prevent students from becoming disengaged, attention must be paid to their emotional comfort, ensuring no one feels left behind. At JIU, students display a wide range of abilities and motivations, from varying levels of English proficiency to differing career aspirations.

To meet these diverse needs, I employ a combination of conventional activities that build vocabulary and listening skills, while fostering conversational abilities. Gamification, group work, pair work, and project-based learning allow students to immerse themselves in real-life scenarios, simulating an overseas experience. These activities also encourage creativity, which is vital for language development. It is not just about learning a foreign language, but also about using imagination and creativity in the process, which, of course, lead to motivating students ultimately.



教授 うしろ ゆうじ
卯城 祐司

【略歴】 筑波大学大学院 教育研究科 英語教育コース 修了
【学位】 博士(言語学)
【専門分野】 英語教育学(英文読解プロセス研究・英語教授法全般・言語習得)

■ 個別最適な学びを目指す一般英語の取り組み (2024年9月26日開催)

本学の一般英語である EAP Basic は 105 分の講義が週に 2 回行われる。英語が苦手な学生たちも集中力を保てるように、授業を英語のドラマ、精読、再話、洋楽、多読の 5 本立てに分割した(最終的には、ディクテーションや Video Clip も追加)。Google Classroom で毎時間、フィードバックを得て、やりとりを重ね(対話的な学び)、その声を拾って、毎回、授業の内容やスタイルを修正している。4 技能 5 領域にわたりオーセンティックな教材を用いて考え(深い学び)、場面で導入、活動で理解し(どのように学ぶか)、Google Classroom 等を活用し、動画や資料を授業前に提示(反転学習)、いつでも復習、先取り学習が出来るようにし、一人ひとりの特性や興味関心に応じて、自身が学ぶこと(個別最適な学び)を心がけた。さらに、TOEIC L&R やパフォーマンステスト(何が出来るようになったかを確認)を学期の前後に実施し、各種フィードバックと共にテスト返しを行い、英語の伸びを可視化し、共有した。その際、学生たちが学びを振り返り、自分で次の目標を立て、そこに向かうプロセスを考え、それをもとに面談を重ね、自己肯定感を高める支援を行った。今後は、さらに学生自身が主体となって学んでいく授業(主体的な学び)を目指したい。